

失樂園殺人事件

小栗虫太郎

一、墮天女記

湯の町Kと、汀なみかわから十丁の沖合
にある鶴島ひえじまとの間に、半ば朽ちた、
粗末な木橋が蜿蜒と架っている。
そして、土地ではその橋の名を、

詩人青秋氏の称呼が始まりで、嘆きの橋と呼んでいるのだ。

その名はいうまでもなく、鶴島には、兼常龍陽博士が私費を投じた、天女園癩療養所があるので、橋を渡る人達といえば、悉くが憂愁に鎖された、廃疾者かその家族に限られていたからであつた。

所が三月十四日のこと、前夜の濃霧の名残りで、まだ焼色の靄が

上空を漂っている正午頃に、その橋を、実に憂鬱な顔をしてのりみずりん法水麟太郎が渡っていた。せめて四、五日もの静養と思い、切角無理を重ね作った休暇ではあつたが、その折も折、構内に於いて矢楽園と呼ぶ、研究所に奇怪な殺人事件が起つたのであるから、対岸に友人法水の滞在を知る以上、副院長の真積まづみ博士がどうして彼を逸することが

出来たであろうか。

また、一方の法水も、外面では
渋りながらも、内心では沸然と好
奇心が湧き立っていたというのは、
兼々から、院長兼常博士の不思議
な性行と、失樂園に纏わる、様々
な風説を伝え聞いていたからであっ
た。

扨、^{さて}真積博士に会った劈頭から、
法水に失樂園の秘密っぽい空気が

触れて来た。真積氏は、まず自分より適任であろうと行って、失樂園専任の助手杏丸医学士を電話で招き、そうした後、こんな意外な言葉を口にしたのである。

「僕が坐魚礁（失樂園の所在地）に、一度も足を踏み込んだ事がないといったら、君はさだめし不審に思うだろう。けれども、それが微塵も偽りのない実相なので、事

実河竹に杏丸という二人の助手以外には、この私でさえも入ることを許されていないなかったのだ。つまりあの一廓は、院長が作った絶対不侵の秘密境だったのだよ」

「所で、殺されたのは？」

「助手の河竹医学士だ。これは明白な他殺だそうだが、妙なことは、同時に院長も異様な急死を遂げている。とにかく、斯んな田舎

警察にも、万代不朽の調書を残してやっつけてくれ給え」

その時、三十恰好のずんぐりした男が入って来ると、真積氏は、その男を杏丸医学士と介绍说した。

杏丸は、まるで浮腫でもあるような、泥色の黄ばんだ皮膚をしていて、見るからに沈鬱な人相だった。然し法水は、まず現場検証以

前に、失樂園の本体と三人の不思議な生活を杏丸の口から聴くことが出来た。

「院長が、坐魚礁の上に失樂園の建物を建設してから、今月で恰度満三年になります。その間完全屍蟻の研究が秘密に行われておりました。つまり、防腐法と皮鞣法ひじゆう、それからマルピギ氏粘液網保存法とが、主要な研究項目だったので

すよ。そして、その間私と河竹は、高給を餌にされて、矢楽園内部の出来事について、一切口外を禁ぜられておりました。で、この一月に完成された研究はともかくとして、ここに何より先にいわなければならぬ事があります。というのは、過去三年を通じて、矢楽園にもう一人、秘密の居住者があつたという事なんです」

と杏丸は懐中から、罫紙の綴りに、「番匠幹枝狂中手記」と、題した一冊を取り出した。

「とにかく、院長が書いたこの序文を読めば、院長という人物がどんなに悪魔的な存在だったかまた、病苦に歪められたその耽美思想が、どういう凄惨な形となって現われたかは、詳しくお判りになりましたよ。そして、これが完全屍蠅の研究。

究以外に、失樂園で過された生活の全部だったのです」

宝相華と花喰鳥の凶模様で飾られた表紙を開くと、法水の眼は忽ち冒頭の一章に吸い付けられて行つた。

××六年九月四日、余は岩

礁の間より、左眼失明せる二十六、七歳の美^{うる}わしき漂流婦人を救えり。

所持品により、本籍並びに番匠幹ばんしょうみ
枝きえという姓名だけは知りたれども、
同人は精神激動のためか、殆んど
言語を洩らさず、凡てが憂鬱狂メラソコリアの
徴候を示せり。されど、時偶発ときたます
る言葉により、同人が小机在の僧
侶の妻にして、夫の嫉妬のために
左眼を傷つけられ、それが引いて
は、入水の因をなせしこと明らか
となれり。そのうち、余の心は次

第に幹枝に惹かれ行き、やがて狂女と同棲生活に入りしこそ浅ましけれ。

されど、余には一つの計画あり、まず、その階梯を踏まんがため、眼科出の杏丸に命じて、幹枝の左眼に義眼手術を施せり。しかして、その手術中彼を強要して、生ける螺旋菌スピロヘーター（黴毒菌）を眼窩後壁より頭蓋腔中に注入せしめたる

なり。実に、大脳を蝕んで、初期に螺旋菌が作り出すものは、現実を超えたる架空の世界ならずや。

即ち余は、幹枝に痲痺狂を発せしめて、それ特有の擬神妄想を聴かんと企てたるものなりき。果して、幹枝の高き教養と脱俗の境地に過せし素質は忽ちに自身を天人に擬して、兜羅綿どらめんの樹下衆車苑に遊ぶの様を唱い始めたり。その聴き去

るに難き美しさは、この一書を綴
るの労を厭いとわぬほどにして、正に
宝積経や源信僧都の往生要集の如
きは、到底比すべくも非ずと思
たりき。

然るに、その最中余を驚か
せたるものありて、幹枝の懐妊を
知れり。早速沼津在の農家に送り
て分娩を終らしめ、再び本園に連
れ帰りしは、本年の一月なりき。

されど、その間において幹枝の心
身には、果して期せるが如く痛ま
しき変化を来たせり。即ち、螺旋
菌の脊髄中に入りしためにして、
運動に失調起り下腹部に激烈なる
疼痛現われて、幹枝の幻想も苦痛
に伴う悲哀の表現に充ち、華鬢萎
み羽衣穢れ　とかいう、天人衰
焉の様を唱うようになれり。かく
なりては、一路植物性の存在に退

化するのみにして、治療の途はあ
れども、余には既に幹枝の必要な
きことなれば、余す手段は安死術
のみなりというべし。

されど、自然は余の触手を
またず、幹枝に大腹水症を発せし
めたり。六尺余りに肥大せる腹を
抱えて、全身は枯瘦し、宛然草紙
にある餓鬼の姿よりなき幹枝を見
れば、ありし日のおもかげの倂何処ぞやと嘆

ずるのほかなく、
転変の鉄鎖の冷
たさは、夢幻まさに泡影の如しと
いうべし。

ここにおいて、三月六日切
開手術を行い、腹水中に浮遊せる
膜囊数十個を取り出せしも、予後
の衰弱のため、その日永眠せり。

斯くの如く、余は幹枝に天女の一
生を描かせ、一年有余の陶醉を貪
りたるものなれば、その終焉しゅうえんの様

を記憶すべく、坐魚礁研究所を失
樂園とは名付けたるものなり

法水が読み終るのを待つて、杏
丸医学士は続けた。

「然し、研究の完成と同時に、幹
枝以外に二つの屍体を、手に入れ
ることが出来ました。二人とも療
養所の入院患者で、一人は黒松重
五郎という五十男で稀めずらしいい松果状

結節癩。もう一人は、これがアディソン病という奇病で、副腎の変化から皮膚が鮮かな青銅色になるものでしたが、この方は東海林徹三しょうじという若い男でした。ですから、現在では三つの屍体が、完全な死蟻に作られていて、それに、院長が纒うんげん縷彩色と呼んでいる、奇怪な粉飾が施されているのです。幹枝は膨ふくらんだ腹をそのままに作り、他

の二人には冥界の獄卒が着る衣裳を纏わせて、いわゆる六道図絵の多面像を作り上げたのでした」

とそういつてから、杏丸の眼にチカツと嗤わらうような光が現われた。

「所が、法規上屍体保存の許可と取引代価を、遺族の者に交渉することになりますと、偶然三人の代表が島へ渡って来ました。それが、一昨々日、つまり十一日の事だっ

たのです」

「すると、まだ滞在しているので
すね」

「そうです。ですから、この事件
は簡単に3 - 2 = 1とはいえない
のですよ。勿論交渉も易々やすやすとは運
びませんでした。大体が、屍体の

閲覧を拒絶した、院長の措置から
発したものでしょうが、黒松の弟も
東海林の父親も、代価に不服をい

い出しましたし、殊に、幹枝の姉
で鹿子と違って、前身がU図書館
員だという救世軍の女士官は、こ
の手記を見ると、途方もない条件
をいい出したのです。それが金銭
ではなく、失樂園の一員に加えて
くれというのだから、妙じゃあり
ませんか」

「成程、失樂園の一員に……」

法水も怪訝そうに眉間を狭ひそめる

と、

「多分、これを見たのでしょう」

と、いつて、杏丸は最後のページ

を開いた。

その日付は手術の当日で、幹枝

永眠す と書いた次に、一枚の

鋤スペードクインの女王が貼り付けられ、その骨かる

牌たの右肩に、「コスター初版聖書

秘蔵場所」とまた、人物模様の上

には「Morrand 足」と書

かれてあつた。

「モルランド足というのは、たしか八本指の、いわゆる過贅畸形だつたね。だが、これは暗号なのかな」

法水が小首を傾けながら訊ねると、真積博士は頷いたが、その下から、

「だがコスター―初版聖書とは？」と反問した。

「あつたら大変だよ。それこそ歴

史的な発見なのさ」

法水は頭から信じないように、

「世界最初の活字聖書は、一四五
二年版のグーテンベルク本だが、

それと同じ年に和蘭^{オランダ}ハーレムの人

コスターも、印刷器械を発明して、

聖書の活字本を作ったという記録
が残っているんだ。然し、この方

は現在一冊も残っちゃいないけれ
ども、グーテンベルク本は時価六

十万ポンドといわれているんだぜ。
だから、もしもこれが真実なら、
実に驚くべしといわざるを得んじや
ないか」

そう云ってから杏丸に、

「所で、事件を発見した顛末を伺
いましょう。院長と河竹医学士と
どちらが先でしたか」

「院長の方です」

と行って、杏丸は、見取図を認

めた紙片を取り出し、法水に与えてから、

「院長は相当時期の進んだ結核患者なので、無風の夜には、窓を開放して眠る習慣になつて居るのです。ですから、今朝の八時頃でしかたか、開いている窓から、異様な姿体が容易くたやす眼に入りました。所が、その旨を河竹へ報せに行くと、室の扉がドア、押せど叩けど開かない

のです。でも一時間余り待つては
みたのですが、何時になつても出
て来ないので、止むなくほかの男
二人と力を併せて扉を叩き破りま
した。すると、河竹は背後から、
心臓に短剣を刺し通されて、俯向
け様に斃されているのです。で、
二つの室の状況をいいますと、院
長の室は、中庭側の窓が開放され
ているだけで、扉や他の窓は残ら

ず鍵が掛かっていたいました。ところ
が、河竹の方はどうでしょう、全
然密閉された室だったのですよ。

それから、屍体検案の結果は、河
竹はまず論なしとしても、院長の
方は、詳細剖見を待つにしろ、ま
ず急性の病死としか思われませ
ん。それに、絶命時刻がまた妙なん
ですよ。院長は、午前二時から三時
までの間と思われませんが、河竹の

方は今朝十時の検視で、絶命後二時間以内という推定しか得られんです。つまり、吾々が立ち騒いでいる間に、叫声も物音も立てなかつた、犯人の陰微な暗躍があつた訳ですな」

といつてから、杏丸は狡猾な笑いを作つて、声を低めた。

「所が法水さん、此処に見逃してはならぬ、出来事があるのです。」

というのは、院長の死を発見する
直前に、屍蝋室の窓下で、番匠鹿
子が卒倒しているのを見付けたの
でした。勿論すぐ室に抱え込んで
気付を与えましたが、その後は顧かえりみ
る暇がないので、十一時ごろになっ
て漸やつと見舞つてみました。する
と、その時は平常通りケロリとなっ
ていて、何時の間にか寝台から離
れて起き上っていたのです」

「すると、河竹の死に対して、鹿子は明白な不在証明アリバイを欠いているという訳ですね」

法水は相手の顔にジロリと一瞥を与えて、

「では、現場へ案内して頂きましょう

「う

二、六道図絵の秘密

失樂園は、鵜島に続く三町四方ほどの、岩礁の上に盛土をして、その上に建てられているのだが、周囲の鬱蒼たる樹木が、その全様を覆い隠していた。本島との間には刎橋があつて、その操作は、院長と二人の助手以外には、秘密にされているとかいう話である。

中央の平地に上図通りの配列で並んでいるのが、失樂園の全部で

あつて、四棟ともいずれも白塗りの木造平屋で、外観はありきたりの、病棟と少しも異なっていなかった。

法水はまず、周囲の足跡を調べ始めたが、昨夜の濃霧で湿っている、土の上にあるものは発見する際の杏丸のもののみで、結局それからは、何も得るところがなかった。

しかし、兼常博士の室に入り、窓越しに対岸の一棟を見ると、斜かいに見える杏丸の実験室がこれも窓が、開け放たれているのに気がついた。

兼常博士の室の窓は、廊下側の二つは単純な硝子窓で、それには掛金が下りているが、中庭側の三つが開け放されてあった。扉は廊下側の左端に、そして、その側の

右隅には寝台があり、その上で兼常博士が、寝衣のまま四肢をややはだけ気味に、仰臥している。

年のころは五十四、五で、ブリアン型の髭さえなければ、余程厳いかつい顔立であろうが、その半ば口を開いた死相を見ると、ただただ安らかな眠という外にない。

室内には位置の異なつた調度類もなく、何処と云い、取り乱され

た形跡がないばかりか、指紋や犯跡を証明するものも皆無であつた。屍体にも外傷は愚か、中毒死らしい徴候さえ、残されていないのである。尚絶命を証明する時刻は、小卓の上に投げた、右手の甲の下で、腕時計の硝子が割れていて、その指針が正二時を指しているだけでも、明らかだつた。

「やはり、心臓麻痺ですかな」

屍体を弄いじっている法水の背後から、杏丸が声をかけた。

「空気栓塞には、猛烈な苦悶が伴いますし、流涎よだれや偏転の形跡もないのでから、脳溢血とも思われませんし……。それに、こんな開放された室内では、有毒瓦斯ガスは用をなさんでしよう」

「そうです。そうあってくれると、実に助かるんですよ」

法水は何故か、反対の見解を匂
寄せたが、今度は屍体の周囲を調
べ始めた。

鍵束は枕の下にそっくりしてい
て、杏丸の話では、各々の室ごと
に鍵の形が異なっているそうであっ
た。が、彼はすぐ寝台から離れて、
附近の床上に眼を停めた。

その辺一体に、ひしやげ乾こわばっ
た膀胱みたいなものが、四つ五つ

散乱しているのであるが、その一
寸程の袋体のものは、杏丸医学士
の説明により、俄然注目さるるに
至った。

「実は私も不審に思っているので
す。これは、幹枝の腹水と一緒に
取り出された、膜囊なんですから
ね。当時、三十幾つか取り出され
て、現在は屍蠅室の硝子盤の中に
貯蔵されているのですがなかには

膜が、相当強靱なものもあるので
すよ」

「なるほど」

と法水も頷いたが、

「全く腹腔内の異物が、こんな所に散乱しているなんて、実に薄気味悪い話です。けれども、そう思うのは、これを犯罪の表徴シンボルだとするからですよ。もし、兇器の一部だとしたら……」

「オヤオヤ、他殺説を持ち出され
ると、前が私の室ですからね。し
かし、この膜囊に有毒瓦斯を詰め
たと仮定しても、これだけの距離
を投擲する前に、第一この薄い膜
が無事ではないでしょう。そう
すると今度は、中庭に足跡がない
と、いふことになってしまうので
す」

と嗤うような杏丸の顔に、法水

は皮肉な微笑を投げた。

「いや、足跡なんぞは要りません。

大体この膜嚢は、中庭とは反対の方角から、投げられているのですからね」

膜嚢の一つ一つを指し示して、

「貴方は、此処にある全部を連れねて行くと、その線が、屍体を中心とした、半円なのに気が付きませんか。その放射状に、なんだか

意味がありそうですね。そうなる
と、後の硝子窓には、掛金が下り
ているのですから、この形が何ん
となく、博士に加わった不可解な
力を、暗示しているようじゃあり
ませんか。とにかくこの情況は、
明白に自然死ではありません。そ
して、他殺にしろ自殺にしろ、こ
の形に、博士の死の秘密があるの
です」

こうして、死因不明のままに博士の室を出ると、その足で、調査を河竹医学士の室に移した。

その室は、同じ棟の中で、間に小室を一つ挟んでいるのだが、窓は凡て鎖され、打ち破った扉だけが開かれていた。室の四辺は、殆んど実験設備が埋めていて、その中央に、寝衣ねまきの上にドレッシングガウンを羽織った河竹医学士が、

扉の方に足を向け、大の字なりに俯伏している。

そして、その背後には、恰度心臓部に当る辺に、柄も埋まらんばかりに深く、一本の短剣が突き刺さっているのだが、血は創口きざぐちの周囲に盛り上がっているだけで、附近には血滴一つない。おまけに、室内で眼に止った現象といえは、屍体の足下に椅子が一脚倒れてい

るのみであつた。

なお、短剣も河竹の所有品で、犯人が手袋を用いたと見え、柄には指紋が残っていない。こうしてすべての情況が、その即死したらしい有様といい、何もかも博士の室と酷似していて、格闘の形跡は勿論のこと、犯人が跳躍した跡は、何処にも見出されないのである。が、然し、扉の鍵が寝衣の衣袋にかくし

ある所を見ると、密閉された室に、神変不思議な侵入を行つた犯人の技巧には、法水も眩惑に似た感情を抑える事が出来なかつたのである。

やがて、屍体から右手の壁にある、鳩時計が鳴き始めると、法水はその側にある、実験用の瓦斯栓までも調べたが、それが最後で、全部の調査を終つたらしく、彼に

似げない吐息を吐いて言った。

「こりゃ全く、手の付けようがない。内出血が起つて、外部へ流れた血が少ないので、刺された時の位置さえ判らんですよ」

「然し、二時前後に博士を殺して、それから夜が明けて、八時ごろ河竹を殺すまでに、犯人は一体どこに潜んでいたのじゃないかな」

と杏丸が、心持仄めかすように

いったが、法水はその言葉に、不快気な眉を顰めたただけで、答えなかつた。

そして次に、三人の来島者を訊問することになったが、二人の男は、何れも杏丸と同じく、昨夜は就寝後室を出ず、今朝騒がれて初めて知つたというのみの事で、黒松九七郎という癩患者の弟は屍体買入代価の増額を希望しているの

みであつたが、東海林泰徳たいとくという
アデイソン病患者の父は、さすが
職業が薬剤師だけに、病の性質上
死期の早かつた点に、濃厚な疑念
を抱いているかのような口吻くちぶりだつ
た。

所が、最後の番匠鹿子になると、
胸に手を当てて、思い出に耽るか
のような彼女の口から、影も形も
ない五人目の人物の存在を、明確

に指摘している所の、実に不気味な、目撃談が吐かれて行つたのである。

「たつた一目妹を見たいと思つたばかりでした。昨夜一時ごろ、あのひどい濃霧の中を、私は屍蠅室の窓下へ参りました。でどうやらこうやら、鎧窓の棧だけを、水平にする事が出来ましたが見えたのは、^{ふくろ}囊のようなものが浮いている、

硝子盤らしいものだけで、それが擦った、マッチ燐寸の火に映ったただけで御座います。けれども、その時あの室の中に誰かいるような気配が致しました」

「冗談じゃない。三つの死蝋の他誰がいるものですか。あの室は、院長以外には絶対に開けられんですよ」

杏丸医学士が険相な声を出すと、

鹿子はそれを強くいい返して、

「それでなければ、妹はじめ二人の方が、生きていた事になるので、実は私、不思議なものを見たいのですわ」

と、まざまざ恐怖の色を泛かべて、鹿子は語り始めた。

「その折、何処かで二時を打ちましたが、私は最後に残った、一本の燐寸を擦りました。すると急に

硝子盤が、真白な光で明るくなつたかと思うと、恰度内部なかを掻き廻しているかのように、囊のようなものが浮きつ沈みつ動いて行くのです。それも、ホンの一、二秒の間でした。私はハッと思った瞬間、駭きと疲労とで、気を失つてしまったので御座います。断じて、幻覚では御座いません。その真実なことは、是非信じて頂きたいと

「思いますわ」

驚いた二人は、思わず慄然としたように視線を合わせたが、杏丸は信ぜられないかの如くに呟いた。

「もし、なかの膜嚢が、破れてでもいるのでしたら、腐敗瓦斯の発散で、動くこともあるでしょうがね。然し、その光というのだけは、どうしても判らん。確かに吾々以外の人物が潜んでいるんだ。其

奴が屹度犯人なんですよ」

そして、狐の様に刺々とげとげしい、鹿

子の顔を凝視みつめるのだった。

こうして、訊問は終了したが、

鹿子はコスタ―聖書に関して、片言さえも洩らさなかったし、一方法水も、鹿子の不在証明を追求しようともしなかつたのである。

然し、法水は何事か思い付いたと見えて、杏丸を残して、二時間

程この室を留守にしていたがやがて戻つて来ると、いよいよ愈最後の調査を、死蝟室で行うことになつた。

死蝟室は、事件の起つた一棟の右手にあつて、その室だけには、

窓に鎧扉が附いていた。その二重扉の内側には、墮天女よ去れ

と許りに下界を指差している、
利天のあるじたいしやく主帝釈のえ硝子画が嵌まつていた。

そして扉の前に立つと、異様な臭気が流れて来て、その腐敗した卵白のような異臭には、布片で鼻孔を覆わざるを得なかったのである。然し室内には、曾て何人も見なかつたであろう所の、幻怪極まりない光景が展開されていた。

それを、陰惨などというよりも、千怪万状の魁奇かいきもここまで来れば、恐怖とか厭悪えんおとかいう、感情など

は既に通り越していて、まず一枚の、密飾画然とした神話風景といった方が、適切であるかも知れない。

扉の右手には、朱丹・群青・黄

土・緑青等の古代岩絵具の色調が見事な色素定着法で現わされている、二人の冥界の獄卒が突っ立っていた。

右はアディソン病患者の青銅鬼で、緑青色の単衣ひとえを纏い、これは

やや悲痛な相貌であるが、左手の
赤衣を着た醜怪な結節癩は、その
松果形まつかさをした瘡蓋が、殆んど鉋物
化していて鑄金としか思われず、
それが山嶽のように重なり合って
眼も口も塞ぎ、おまけに、その雲
を突かんばかりの巨人が、金剛力
士さながらに怒張した四肢を張つ
て、口を引ん歪め、半ば虚空を睥へい
睨げいしているのだ。

そして、その二人に挟まって蹲しゃがんでいるのが、頭髪を中央から振り分けて、宝髻形ほうきがたに結んでいる、裸体の番匠幹枝だった。肋骨の肉が落ち窪み、四肢が透明な琥珀色に痩せ枯れた白痴の佳人は、直径二尺に余る太鼓腹を抱えて、今にもそれが、びくびく脈打ち出しそうだった。

然し法水は、それに一瞥を呉れ

たのみで、すぐ死蟬と窓との間に
ある、卓子テーブルの側に歩んで行つた。

幹枝の腹から出た腹水と、膜囊
を容れた大きな硝子盤が、その上
に載っていて、褐色をした濁つた
液体の中に、二十余りすつぱん鼈の卵みた
いに、ブヨブヨしたものが浮いて
いた。そして、異臭も腐敗した腹
水から、発していることが判つた。

其処で、杏丸を顧みて法水がいつ

た。

「この腐敗瓦斯には、硫化水素の匂いが強いじゃありませんか。硝子盤の下の布も、淡緑色に変色しています。多分犯人は、これから純粹の瓦斯を採取して、それを膜囊に充したもので、博士を殺した、とでもたしか思わせたかったのでしょう。けれども、生憎硫化水素は、患者の毒気といわれるほ

どで、到る処に痕跡を残して行く
のです。それに、たとえ仮令純粹のもの
でも、昨夜のような、猛烈な濃霧
にあ遇つちやたまりませんよ。散逸
する以前に、何より水蒸気が、吸
収してしまえますからね。さてこ
れから、鹿子の目撃談を解剖しま
すかな」

と、法水は窓際に立って、暫く
中腰になり、硝子盤と睨めっこし

ていたが、やがて莞爾と微笑んで腰を伸ばした。杏丸医学士は、その様子を訝かしがって、法水と同じ動作を始めたが、この方は、単に不審を増すに過ぎなかつた。

「僕には、貴方が得たり顔をした、理由が判りません。疑問はいよいよ深くなる一方じゃありませんか。破れた膜囊がないのですから、第一浮動した説明が、付かないでしよ

う。それに、鹿子が見た光という
のが、また問題です。それが、ガ
ラス窓越しに中庭の向うから放た
れたのだとすると、見た通りガラ
ス盤の後方は、二人の死蝻が着て
いる、朱丹と緑青色の布とで塞がっ
ているのですから、あの様に真白
に見える、気遣いはないのです。
いよいよ以って、妖しい光は、ガ
ラス盤の周囲で起つたことになり

ますよ。犯人は、明白に吾々四人以外の、霧のような人物です。それなのに、どうして貴方は？」

「その理由はほかにあるのですよ」
法水は静かにいった。

「で、こういったら、或は皮肉と
考えられるかも知れませんが、鹿
子の目撃談が「*」鹿子の目撃談
が「に傍点」、真実に証明された
からなんです」「*」真実に証明さ

れたからなんです」に傍点」。ねえ杏丸さん、その刻限が、恰度博士の絶命時刻に、符号しているでしょう。ですから、暈ぼんとした気体のようなものから、結晶を作つてくれる、媒剤を発見した気持がしたのでですよ。つまり、以毒制毒の法則が使えるからです。謎を以つて謎を制すのです」

「だが、犯罪の捜査に弁証法は信

「ぜられませんか」

杏丸は反駁した。

「何より直覚ですよ。貴方は何故鹿子を追求しないのです？」

「ハハハハハ、ところが、鹿子より以上の嫌疑者がいますぜ」

「なに、鹿子以上の？」

杏丸は驚いて叫んだ。

「それが杏丸さん、貴方だとしたらどううしますね」

法水は止めを刺すようにいった。

「先刻、貴方の実験室の棚の中から、こんなものを発見したのです。

このくの字なりの木片は、御覧の通り飛去来器ブーメラング（いわゆる『飛んで

来い』という玩具）です。そして、

それを銜くわえている、穴のある紙製の球形は何んでしょうかねえ。僕

は大体において、この事件が判つたような気がして来ました。サア、

貴方がたは本島の方へ行つて、しばらく僕を静かに考えさせて下さい」

三、コスター―聖書を曝く

真積博士をはじめ関係者一同が、片唾をのんでいる席上へ、法水が現われたのは、日没を過ぎて間もなくの事だった。そして、席につ

くや静かにいった。

「犯人が解りました」

「コスター―聖書の在所ありかもですか」

サツと引き緊った空気の中で、

まるで殺人事件には関心がないか

のよう、鹿子が始めてコスター―聖

書のことを口に出した。

その唇は鉛色に変わって、戦おののいて

いる顛こめかみからは汗が糸を引き、そ

の眼には明らかに、〇の素晴らし

い行列を追っている、卑しい欲求
が燃え熾^{さか}っている。

「左様、コスター聖書もです。で
は、順序を追ってお話し致します
が、所で、私を分析にまで導いて
呉れた鍵^{キー}というのが、何あるう鹿
子さん、実は貴女の眼だったので
すよ」

と騒然となった一同を制して、
法水は語り始めた。

「如何にも、あの目撃談は真実です。まさに、妖しい白光が起り、内部の膜囊は動いたのです。すると、無論その光の光源が、硝子盤の附近にあれば、事実あの室に人間が潜んでいたか、それとも、超自然の妖怪現象になるのですが、飽くまでも実在性を信じたい私は、その光源を、硝子盤の遙か後方に持つて行ったのです。けれども、

硝子盤の背後には死蟬が着ている、
朱丹と緑青色の衣裳があつて、そ
れが障碍しょうがいになります。然し、この
場合は却つてその障碍が、鹿子さ
んの眼にあり得ない不思議を映し
たのでした。鹿子さん、たしか貴
方の眼は、軽微な赤緑色盲に罹つ
ているのですね」

「それを、よくマア御存知で……」
と思わず鹿子は、驚嘆の声を発

して、法水の顔を呆れたように見
入った。

しかし、法水は事務的に続ける。

「ところで、生理学の術語にフュー

ゲル彩色表という言葉があります

が、彩色した表面に灰色の文字もじを

書いて、その上を薄い布で覆うと、

色盲には、その字が消えていて読

めないのです。あの場合が恰度そ

れに当て嵌っていました。つまり、

一口でいうと、後方に起つて硝子盤の中に入った光が、赤と緑の布を通過しているのですから、それを透した褐色の腹水は、鹿子さんの眼には灰色としか映えみません。従つて、なかにある、同じ色の膜嚢は消えてしまつたのです。しかもそれが燐寸の火で見た瞬後なのですから、恰度膜嚢が、浮動するよつな錯覚を起したのですよ。皆

さん、こうして私は、硝子盤の後方に、光るものを証明することが出来たのですが、さてその光源が何処にあったかというところ、それは幾つかの硝子窓を隔てた、兼常博士の室だったのです」

そして、法水が飛去来器ブーメラングと紙製

の球体を取り出したのを見ると、杏丸は顔を伏せ、焦だたし気に爪を噛み始めた。

法水は続けて、

「実は、この二つのものが、博士の室の対岸にある、杏丸氏の実験室から発見されたのですが、投げた手許に再び戻って来る、飛去来^{ブーメラシ}器^グの性能を考えると、どうしても、杏丸氏に疑惑をかけざるを得ません。それにこの、所々円孔の空いた紙製の球体は、花火の弾殻なのですよ。そうすると、膜囊に有毒

気体を充たしたものを孔につめて、
弾殻には極く力の弱い煙硝を使い、
そして、飛去来器に嚙ませて、そ
れを飛ばせたとすれば、適当な場
所で煙硝の燃焼から飛び出した膜
嚢が、恐らく死因不明の即死を起
させやしないでしょうか。勿論、
弾殻は飛去来器に伴って、再び手
許に戻って来るのですが、その時
の火花が、幾つかの硝子窓を通つ

て、屍蟻室の硝子盤に映じたので
「す

その瞬間杏丸に向けて、何やら
含んでいそうな視線が、一斉に注
がれた。

が、法水には抑揚さえも変らな
かった。

「然し、もう一步進んで、飛去来
器特有の弧線飛行を 殊に復路の
大きな弧線 を考えると、杏丸氏

の室を基点とする容易い解釈が、
実に誤った、皮相な観察に過ぎない
事が判るのです」

それから、見取図に弧線を描いて、
法水は説明を続けた。

「御覧の通り、杏丸氏の実験室からでは、
位置が一寸斜はすかいになって
いるので、弧線のために、隣室に
打衝ぶつかつてしまうのです。また、煙

硝が直接火を呼ばないためには、

導火線の長さも考えなければなり
ません。そうすると、飛去来器使
用の犯行が、すっかり行き詰まっ
てしまうのですが、私は不図した
思い付きで、復路が終ろうとする
際に、もう一度、飛来する力を与
えたらと思いました」

「なに、もう一度……」

真積博士は、驚いたように顔を
挙げたが、その眼を法水は、冷や

かに弾き返して、

「つまり、折り返した時の大きな弧線の中で、反対の方向へ、もう一度弾き飛ばす動力に思い当たたからです。その力が、煙硝の燃焼でした。そうになると、今度は基点が変わって、博士と同じ棟にある、河竹の室になるのですが、まず飛去来器を、対岸の杏丸氏の実験室に飛び込ませるとその折返おりかえした大

きな弧線が、兼常博士の室に入ります。その時、煙硝が燃えたのですから、膜嚢を排出した時の排気の反動で、恰度ロケットのような現象が現われたのです。ですから、その新しい力を与えられた飛去来器は、再び来た線を逆行して、もとの杏丸氏の実験室の中へ飛び込んでしまったのですよ」

そうなってみると、一体犯人が

誰なのやら、とんと霧中を彷徨う
の感じだった。現象的には、解決
の近さを感じるとは云え、肝心な
一人の名　それが法水の口から、
何時かな容易に洩れようとはしな
い。

「要するにこれは、犯罪を転嫁し
ようという行為なのですが、飛去
来器といい花火といい、十分理学
的に計算出来る性質のものですか

ら、この犯行には相当の確実性があります。使った有毒気体は、屍体に青酸死の徴候がない所を見ると、多分砒化水素だったのでしよう」

「だが、瓦斯は散逸してしまうぜ」
真積博士は、もう一度反駁した。

「所が一瞬に床へ下降させたものがあつたのだ。それに、あの猛烈な濃霧ガスさえなければね」

と法水は皮肉にいい返してから、
「所で、霧の中へ、温度の違う気
流が流れると、霧が二つに分れる
現象を御存知でしょうか。つまり、
ヘルムホルツなどという、偉い学
者の名を使わなくても、水蒸気の
壁と温度の相違が、散逸を防ぐか
らなのです、ですから、昨夜の濃
霧は、犯人にとると此の上もない
好機だったのですが膜囊が破れて

飛び出した砒化水素は、炸裂に際して起る旋廻気流が上方にあつたため、それに押されて、長い紐状となつて下降して行きました。そして、その一端が、博士の鼻孔に触れたのです」

「すると、犯人は？」

「無論、河竹医学士です」

「では、その河竹を殺した者は？」

「所が、河竹は自殺したのです」

法水は笑った。ああ、凡ゆる情況が転倒されてしまったのだ。

「河竹の捻れた性根は、自分の悲運を何人かにも負担させようとして、実に驚くべき技巧を案出しました。あの短剣は、横手にある実験用瓦斯の口栓から、発射されたのでした。まず河竹は短剣の柄をつか栓の口に嵌め込んでから、そこと元捻迄の鉛管に小さな孔を開けて、

其の部分の空気を排気ポンプ筒で抜いてしまったのです。そして元捻には蝶形の一方に糸を結び付け、片方の端を、鳩時計の小さい扉の中にある、螺旋に結び付けました。その螺旋は、一時間毎に弛んで、弛んだ時に小扉が開き鳩が動くのですが、勿論その仕事は、時間が来て小扉が開く、直前になされたと見なければなりません。すると、

時刻が来て、鳩の出る扉が開くと、糸が押されてピインと張るので、蝶形を引いて瓦斯の栓を開きます。そして、真空の中に噴出する凄じい力が、口元の短剣を発射させたのでした。然し、計量器のねじ「*「ねじ」に傍点」が閉つていたので、噴出した僅かな量は、瞬く間に散逸してしまいました。また、一方の糸は手許に引いた機はずみ

に蝶形から抜けて、その後一時間
の間に、鳩時計の螺旋の中に納め
られてしまったのですよ」

「では、やはり河竹が犯人だった
のか。それにしても、一体どう云
う動機で……」

と同じような意味を、真積博士
と杏丸医学士とが、眼の中で囁き
続けているうちにも、法水は舌を
休めなかつた。

「で、その動機をいうと、自分に
兼常博士を殺させたものが、途方
もない正体を現わしたからで、そ
れはいうまでもなく、コスター聖
書でした。河竹は、漸くその在あり所か
を知ることが出来たので、強奪を
企んで兼常博士を殺したのですが、
不思議なことにコスター聖書は、
自身を河竹に奪わせなかつたので
す」

「おお」

鹿子が思わず狂的な偏執を現わし、卓子の端をギョツと掴んだ。

「如何にも、河竹に続いて、私は
コスター―聖書の秘蔵場所を突き止
めました。それには、無論あの骨^カ
牌^ドに示された、博士の謎を解いた
からですが、あれは非常に他愛な
く、こんな具合に解けて行くので
すよ」

法水は、始めてたばし苮を取り出し、
悠悠暗号の解読を始めた。

「大体、モルランド足というのが
八本趾ゆびで、普通より三本多いので
すから、その剩あまった三という数字
が、この場合三字を控除せよ

という意味ではないかと思いまし
た。そして、とつおいつの拳句、
モンドの三字を除いて、さて残つ
たらとルとで、今度はラを左へ横

倒しにしてみると、丁度その二つが、紙に書いたルの字を裏表から眺めた形になりました。これこそ、死蟻室の扉にある。帝釈天の硝子画ではないでしょうか。また鋤スペードクインの女王は、そのどう向けても同じ形のところから、井という字の暗示ではないかと考えたのです。それで、硝子画の帝釈が指差している床下を探ると、果してそこに、

自然の縦孔があつて、コスター―聖書はその中から発見されました」

そういつて鹿子に向き直り、法水は莞爾にっこりと微笑んだ。

「然し、その所有は明らかに貴女へ帰すべきです」

法水の衣袋から、時価一千万円に価する稀覯本きこうほんが取り出される刹那は、恐らく歴史的な瞬間でもあつたし、また驚異と羨望とで、息吐

く者もなかつたであろう。　　が取り
出されたものを見ると、一同はアッ
と叫んだ。

なんとそれが、聖書は愚か、似
てもつかぬ胎児のような形をした、
灰色の扁平ひらべたいものに過ぎなかつた
のだ。

鹿子は怒りを罩めて叫んだ。

「お戯れは止めて下さい。サア早
く、コスター―聖書を」

「これがそうなのです。兼常博士は、この胎児の木乃伊ミイラをコスタ―聖書に比喩たとえたのですが、その理由はというと、双胎の一方が圧し潰されて出来る紙形胎児を、単に他の美しい言葉と換えたに過ぎなかったのです」

法水は、今にも泣き出しそうな鹿子の顔を見ながら、静かにいった。

「幹枝さんに妊みごもつたのは、双胎児
だったのですよ。所で、虚弱な双
胎児は、片方が死ぬと、残された
方が健全に育つのですが、幹枝さ
んのも恰度それで、つまり、一方
の犠牲になつたというのを、切角
同時代に印刷器械を発明して聖書
を作りながらも、グーテンベルグ
の光輝のため、暗の中へ葬られた
不運なコスターに比喩えたのです。

ねえ皆さん、兼常博士と河竹医学
士の生命を絶つたものは、実に、
この一つの比喩にすぎなかったの
ですよ」

底本：「二十世紀鉄仮面」桃源社

1971（昭和46）年1

1月15日発行

本作品中には、身体的・精神的
資質、職業、地域、階層、民族な
どに関する不適切な表現が見られ
ます。しかし、作品の時代背景と
価値、加えて、作者の抱えた限界
を読者自身が認識することの意義
を考慮し、底本のままとしました。

（青空文庫）

入力：野口英司

校正：小浜真由美

1998年8月8日公開

2000年1月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネット

の図書館、青空文庫（[http:](http://www.aozora.gr.jp/)

[/ / www . a o z o r a . g r .](http://www.aozora.gr.jp/)

[j p /](http://www.aozora.gr.jp/)）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボラ
ンティアの皆さんです。